第2号

うずまのほたる

平成１５年１１月１日
ほたる飛び交う中地区をめざす運動の会
会　長　森田　弘
広報班長　田中佐一

ほたる雑感三題

蛍（体は細長くなんじゃく、背面は扁平。触覚は糸状。多くの水辺の草むらに住み、多くは腹端に発行器を持ち、夜間、青白い光を点滅する。ゲンジぼたる、ヘイケぼたるなどの種類がある。）辞書の片隅で永遠に眠り続ける虫と思っていた、その虫が飛んだ光った、しかも学校の庭で、誰もが予想しなかった。

それを見て感激、感動した古老、中老に昭和初期小川の草むらのうえを飛び交った様子を思いおこして綴っていただいたものです。

ホタルの思い出

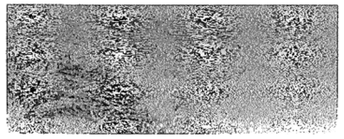
中地区自治会連絡協議会長　増田博利

小学生の頃、巴波川はいたるところから清水が湧き出していて、飲めるようなきれいな川でした。毎年５月の下旬頃より川岸はほたるが飛び交い、家の庭先まで飛んできて、ほうき等で捕獲し蚊帳の中に放し遊んだ頃を懐かしく思い出だします。

昭和の３０年頃から農薬の使用や水の汚れ等により、年毎に少なくなってほとんど見られなくなり、忘れられてしまいました。しかし、平成１３年中小学校ＰＴＡの呼びかけにより自治会長さん初め地域内の有志の方々の御協力にて、『ほたる飛び交う中地区をめざす運動の会』が組織されました。当時の役職員、現公民館長、地域ボランティアの方々の奉仕作業により、校内に「ほたるのビオトープ」なる施設が完成を見ました。大変感謝致します。

また、その為の幼虫の飼育については、中公民館長さんを初め前号でご承知のとおり大勢の方にお世話になっています。１０ヶ月近い朝夕の管理によって７００匹以上の幼虫が２月に放流され、６月には盛大に「ほたるを観る会」を開催することができたのも、そのような多くの方々の御協力のおかげです。当日は地域内は元より地域外からも予想以上の人達が観賞に訪れてくださいました。

これからも、中小学校を中心に地域の多くの皆様方の御参加御協力をいただきながら、この運動の輪がさらに大きくなることをお願い致します。



ホタルと水

下泉　岸　操（８８歳）

中小学校の門を入ると、根元の盛り上がったえの木は元気な枝を伸ばしています。懐かしい思い出に迎えられて門を入ると、北側に「ホタルビオトープ」と標示された池が見えました。ホタルを保存し飛び交う地域にしようと地元の人たちがお骨折りなされいます。御苦労様でございます。

８０年前の思い出として、ホタル飛び交う巴波川など述べてみたいと思います。

６月頃田んぼに水が入ります。雷様が鳴り、夕立が降りそうになりますと、田んぼの蛙が一斉に泣き出します。「早く家に帰りなさい。」と促したのです。夜はホタルの光が水面に映されキラキラと輝きました。その光を追いながら、「ホタルこい。此っちの水は甘いぞ。」と歌いながら楽しみました。また、川の上に多数のホタルが群れ集まって『ホタル柱』を見せてくれました。その見事な光景は今も忘れられません。

それらのホタルもきれいな水で育ったのです。私達もホタルと共に生きてきたのです。満々と水の流れていたあの巴波川は忘れられない懐かしい思い出です。

夏休みになると、子供たちは川に飛び込むのが日課です。急に水のかさが増したと思うと、上流から電柱を組み合わせて運んだ『イカダ』が流れてくることもありました。その上に乗せてもらい川の流れと遊んだのも楽しい思い出です。色々な魚を捕まえて生活の場としたのも貴重な自然でした。

時代の変化によって絶滅かと思われたホタルも、「ビオトープ」によって復活し、懐かしいふるさとが再現されることは、自然豊かなふるさとが甦えるばかりか、情緒豊かなゆとりある世の中が見えてくるような気さえします。

「ホタルの光窓の雪‥‥」と卒業式に歌ったのはいつの日か。「ホタルの光」と「水」を永遠の友としたいものです。

うづま川の蛍

上泉　岡本一男（８５歳）

現在のほたる橋周辺は、ほたるの名所として天然記念物の指定を受け近郷近在からほたる狩りの人達でにぎわった所です。夜になると数千匹のほたるが乱舞してほたるの渦ができ光の柱ができるのです。やがて柱はくずれ他の所にまた光の柱が出来るのです。それは実に見事なものでした。

うづま川の川辺には、数軒の料亭があり料亭では屋形船を用意し、川の水量が少ない為に橋の下流に堰を作り、川の水位を上げ、ほたる狩に来た人達を屋形船に案内し、ほたる橋の上下を行き来して、酒を酌みながらほたる狩りを楽しむとゆうまことに風流な光景が毎夜続いたものです。

現在のうづま川は、昭和の初期からの河川改修により川の幅は三倍ほど広くなり、川の両岸は現在の堤防ができ対岸には大きな林がありましたが改修工事により伐採され川の敷地となったのです。

現存するほたる橋は、改修により昭和９年に完成し今も地域の人達にとって無くてはならない橋として昔のすがたを残しております。川の改修はほたるにとって大きな影響があったと思われます。

また、栃木市の中心を流れ、中地区を流れるうづま川にも大きな変化がありました。うづま川の水質が各家庭の雑排水を川に流し込む為大きく悪化したのです。ほたるのえさである（カワニナ）が水質の悪化により住む事が出来なくなったのです。かくしてうづま川のほたるは全滅したのです。

うづま川の水質を改善するには、住民の協力と各自治体の協力が必要です。汚水処理場を作る事が必要なことですが、これには膨大な費用がかかります。この事は大変むずかしい問題です。

近年自然を大切にする運動が盛んになっている様です。早々、今のうづま川の水が改善され、ほたる橋の近辺に幻想的なほたるの光が乱れ飛ぶ姿をとりもどす事が出来るよう要望するものであります。

「あっ、光った！」

中公民館長　松本旭巧

身近にいたはずの小さな生き物が、いつの間にか姿を消していく。かって、蛍の名所であった中地区の蛍もその一つである。まだ、いっぱい自然が残っているように見えても、小さな生き物にとっては、生きていくことができない環境になってしまったのであろう。

「蛍のビオトープ」づくりは、単なる水路づくりではなく、いかにしたらこわれていない小さな自然環境を作り出し、維持してくかである。

これらの活動を通じて、共に汗をかき、感動を味わうことで多くのことを学び「人の輪」が広がっていくことが、子供たちの「蛍の飛び交う蛍橋を取り戻したい」夢に一歩近づくことになる。

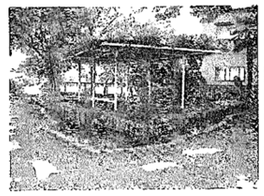
平成１４年の５月下旬、まだ、はだ寒い夜。ほたるを飛ばす迄には最短でも３年かかると言われていたが、それでも一匹でもよいから光を見たい。そうすれば活動にも「弾み」がつき頑張れると。そんな思いをもちながらビオトープの網に顔を押しつけるように、暗やみを見続けていたにちがいない。

「あっ、もしかして」と、光ったような気がして良く見つめなおすと、それは夜つゆが遠くの光に反射したものだった。今晩もダメかと思い始めた時、誰かが大声で叫んだ。『あっ、光った！』『いた！』『ほたるだ！』『ほんものだ！』と。そのことは直ちに関係者に知らされ、やがて網のまわりに人だかりができた。

この事業が始まって以来、共に汗を流した人達だ。期待と不安というよりも、殆んどが不安であったにちがいない。

この夜、羽化した蛍は数匹であったが、暗がりに見えた光は、それ以上であった。これまでの思いが、苦労が、こみあげてきたのであろう。これで予定通り「ほたるを見る会」ができる。子供たちや地域のみなさんにすばらしいプレゼントができると、力強い足どりで帰途についた。

ビオトープはこのように造られました。



水辺のビオトープ　生態調査

3年　原　尚也
はだしで、池にピチャッと入った時足のうらがぬめっとして、つめたくて気もちよかった。
ぼくは、ザリガニを二ひきつかまえた。来年は、がんじょうなあみを持ってきて、大きい魚を、とってやろうと思った。

小林史明
子供たちが夢中になって水に入りたくさんの魚をとっている姿を見て昔自分も同じ様な事をしていたのを思い出しました。
何種類もの魚やザリガニ等がとれ、中地区も自然が豊かなものだと感じました。

池羽径世
子供達は、網を片手に、泥だらけになりながら夢中になって生き物を追いかけ、たくさんの種類の生き物を捕まえました。その度に、ビオトープは大きな歓声と笑顔に包まれて、私達大人も一緒になって、はしゃいでしまいました。
大人も子供達も、同じ目線になって楽しい時間を過ごせる、この「水辺のビオトープ」が、大切な場所になっていることを、改めて実感しました。

小林航己
フナやコイなどたくさんの魚がとれて、たのしかったです。らいねんは、もっと大きな魚がとりたいです。

池澤幸代
「川遊びは危ない。」と言う今、水の中にはどんな生き物が居るのかを、図鑑で調べる子供達にとって、こうした整備をしながらの調査はとても良い機会だと思いました。
泥まみれになって、あみで生き物をすくう生き生きとした姿は、子供達も大人も一緒でした。

3年　池羽航亮
はじめは、どろとか、みみずの赤ちゃんしかとれなかったけど、だんだんとれるようになりました。
とれたのは、めだかと、ふなと、ほかと、ザリガニです。らい年は、もっといっぱいとりたいです。

参加児童のおじいちゃんより
子供達が泥んこになりながら嬉々として魚を追い回す姿を見て昔を思い出しました。この様な企画をされた諸機関の方々のご苦労に感謝申し上げます。
獲物の中で、鯉・鮒・ドジョウは懐かしいもの、タナゴの代わりにクチボソ・ザリガニが繁殖し、ナマズが見当たらないのは寂しい限りです。

5年　池沢 恵梨菜
小さな水辺のビオトープの中に、たくさんの種類の生き物が住んでいるのがわかりました。
学校のビオトープは、きれいな水だけど、汚れている今の川はどれくらいたくさんの生き物がいるのか、調べてみたくなりました。

木道づくり

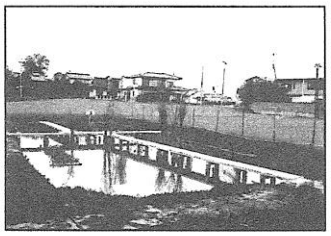
中小学校PTA会長　松 井 正 弘

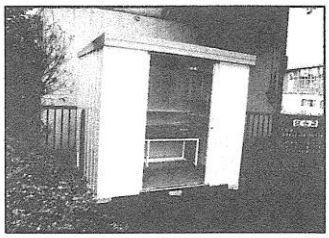
7月21日（土）、曇り空の中、新しい木道造りが始められた。柳田建築さんの指導のもと、地域の皆様や学校の先生方、保護者の方々の協力を得て、松の木を土台とした立派な木道が完成しました。
今年で3年目を迎えた水辺のビオトープの木道ですが、傷みが目立ってきたので子供たちの安全を考えての作業でした。古い木道の材木は、地域の皆様からの寄付で全部まかなわれ作られたものです。
平成13年の夏、自治会長さんをはじめとする地域ボランティアの皆様方で、試行錯誤しながら汗水たらして作った手作りの木道。取り外された古い木道をリヤカーに積み運びながら、当初のことがあれこれ思い出されました。
今回も、「学校のため、子供のため」という地域の方々の気持ちで作られた新しい木道。また、この新しい木道の上を多くの子供たちが行き交い、自然に触れ、水中生物の生態などをしっかり学んでくれることでしょう。

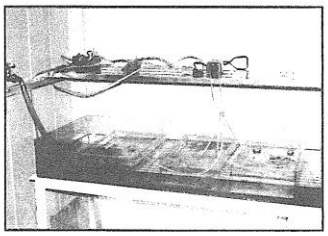
ほたる温度管理のためのハウス工事

中小学校教頭　町 田　繁

ほたる幼虫飼育時の水温調節を、「ほたるを観る会」が盛大に行われている頃から、ほたる飼育班の人達の活動が活発になります。雌雄を捕獲し、卵を産ませ、ふ化させその糸くずのようなきわめい小さい幼虫を大きく育てあげていく仕事が待っているからです。糸くずみたいな幼虫は、きれいな水と18度ぐらいの水温でないとすぐ死んでしまいます。そのため、水とり替えと水温管理を欠かすことができません。
特に暑い夏は大変です。この大変な苦労を少しでもやわらげようと、ほたるのビオトープの水流を活用して、水温管理しやすい施設を、8月16日、ほたるの会の人達10名で半日かかって作り上げることができました。
その後の残暑の中も、今後の寒中も、この施設で水温は一定に保たれることでしょう。
飼育している人の苦労のわずかかも知れませんが、この施設でいやせたらと思います。是非、活用してください。







編集委員

広報班長　田中佐一
田波耕太郎
池澤幸代
須賀和枝
石原昭代
原友美
池羽径世
青木環

編集後記

第2回広報誌発行にあたりお忙しい中、原稿執筆をお願いし快く引き受けて下さった皆様には、心より感謝いたします。
今回は、6月の「ほたるを観る会」から、その後のほたるの活動紹介や、地域の方の「昔のほたるのお話」を載せました。
この会も発足して早3年が過ぎようとしていますが、今でもまるで昨日の事のように思い出します。みんなが惜しみなく力を合わせ、ひとつひとつ手作りで作り上げたビオトープ。頭から足の先まで、汗と泥だらけになって作業している姿に、心打たれたあの感動は今でも忘れません。
こうした皆様のご好意で作られた、ほたるのビオトープを盛り上げて行けるように、私たちPTAが子供たちと一緒にこれからも頑張って取り組んでいこうと思います。今後とも御協力をよろしくお願い致します。

ほたる広報委員一同